

第13回国際カイガラムシ学会参加旅行記

鳥取県立博物館 田中 宏卓

2013年の9月2日より6日までの間、ブルガリアの首都ソフィアで開催された第13回国際カイガラムシ学会(XIII International Symposium on Scale Insect Studies)に国際社会性昆虫学会日本支部会の援助を受けて出席してきました。このような機会を与えていただいた報農会のご援助に深く感謝いたします。

学会はソフィア市内のホテルで行われ、今回は世界各地から70名ほど、中国・韓国など東アジア地域からは10名ほどが参加されました(日本からは残念ながら私1名)。規模としてはかなり小さな学会ですが、世界的に著名な研究者も参加されていて非常に意義深いものだったと思います。

今回の学会初日には簡単なオープニングセレモニーのあと、学会直前に急逝したカイガラムシの分類研究の大家であるハンガリーのFerenc Kozár博士や同じくカイガラムシ類の研究者で学会前に亡くなられたニュージーランドのRosa Henderson博士、南アフリカのJack Munting博士の追悼式が行われました。私はKozár博士と博士の死去より10日ほど前に日本で採集された未記載種(=新種)のカイガラムシについてメールのやりとりをしており、またHenderson博士とも数年前にメールや標本のやりとりをしたことがありましたのでこの追悼式で紹介されていた故人の業績と人生の軌跡を拝聴していて、なんとも言えない寂しさと悲しさを感じました。

この学会では計6つのセッションが設けられており、私の発表は2日目のBehavior and General Biologyのセッションで行なわれました。初めての英語口頭発表で非常に緊張しましたが、スライド・発表原稿を共同研究者の協力を得て入念に準備していたことが奏功したのか大きなミスもなく無事終えることができました。発表後にはオーストラリアのPenny J Gullan 博士やイギリスのChris J Hodgson博士他数名の方より「よくやった(well done)」「とてもよかった(very good)」「とても面白かった(very interesting)」などと声をかけていただいたので、社交辞令や激励の意味もあるにしろ、まあまあそこそこうまくできたのではないかなと考えています。

今回の学会では自分の発表もさることながら論文でしか知らないカイガラムシ研究界の巨人達とお会いでき、片言とはいえ実際に言葉を交わすことができたのがたいへんよい経験でした。上述のPenny J.Gullan 博士やChris J.Hodgson博士をはじめ、Michael L. Williams博士、Lyn G. Cook博士などとは夕食をご一緒させていただくこともできました。さらにはアメリカのNate B. Hardy博士、トルコのBora Kaydan博士、中国のSan-An Wu博士、韓国のS. J.Suh博士、台湾のYen-Po Lin博士など若手で活躍されている方やそれ以外の方で海外でカイガラムシ研究を精力的に行っている方と親しくできたのもたいへんよかったです。これらの方と実際に知り合うことができ、また顔を覚えていただけたことは今後私が研究活動を続けていく上での大きな励みとなると思います。

繰り返しになりますが今回の学会参加に際しての報農会からの渡航費援助に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。



学会のオープニング



ポスター会場の様子



Social dinner での一幕



研究内容の近い方々との懇親会